

聖書：Iサムエル27：1～28：2

説教題：ほかに道はないのか

日時：2017年7月23日（夕拝）

ダビデは一体どうしてしまったのでしょうか。彼は1節でこう言っています。「私はいつか、いまに、サウルの手によって滅ぼされるだろう。ペリシテ人の地にのがれるよりほかに道はない。そうすれば、サウルは、私をイスラエルの領土内で、くまなく捜すのをあきらめるであろう。こうして私は彼の手からのがれよう。」彼は「ほかに道はない」と言って、ペリシテ人の地へ出て行きます。これは正しい判断だったのでしょうか。彼は26章24節で、立派な告白をしました。「きょう、私があなたのいのちをたいせつにしたように、主は私のいのちをたいせつにして、すべての苦しみから私を救い出してくださいませ。」この言葉によれば、主はダビデがどこにいても守ってくださるはずではないでしょうか。思い起こされるのは前にも一度サウルに追われて、ダビデがペリシテ人の地へ逃げて行ったことです。彼はそこで気が違ったかのように振る舞い、捕らえられて狂ったふりをし、門の扉に傷をつけたり、ひげによだれを流したりしました。その後、預言者ガドがダビデに現れ、こう言いました。「この要害にとどまっていなくて、さあユダの地に帰りなさい！」こうして主の御心を示されてイスラエルの領土内に帰って来たダビデ。その彼がまたペリシテの地へ出て行きます。ここに、そうせよとの神の指示があったわけではありません。またこのことについてダビデが神に御心を問うたという経過もありません。果たしてこれは信仰の見地からなされた判断だったのでしょうか。「ほかに道はない」「ほかに道はない」と彼は言っていますが、本当にこうするより他に道はなかったのか、とこれまでを読んで来た私たちは思うのです。

きっとダビデは長い逃亡生活を経て疲れ切ってしまったのでしょうか。サウルは繰り返し、命を狙って来ます。「私は悪いことをした。あなたは必ずイスラエルの王になるであろう」と言いながら、26章でもまたダビデを追いかけて来ました。二度あることは三度ある。いや、このことは際限なく続くのではないか。ダビデはその間、荒野で逃げ回る生活の連続です。少しも落ち着くことができません。昨日の夜は岩を枕にして寝たかと思うと、次の晩はほら穴の奥でひっそり眠らなければならない。いつ敵が襲って来るか絶えず神経を尖らせていなければなりません。しかしペリシテの地に行けば、サウルが追いかけて来ることはなくなるでしょう。そうすれば一息つけます。今よりははるかに安心して毎日を過ごすことができます。それにダビデには600人の人たちが一緒にい

ました。この彼らのことも気遣わなくてはなりません。この大集団がずっと隠れて状態で生活することには限界があります。生計を立てることも困難です。だから今はペリシテ人の地へ出て行って、その王の守りの下に身を置くよりほかに道はない。ダビデはこうして 600 人の者たちを連れてペリシテの地へと出て行ったのです。

さてその結果はどうだったのでしょうか。4 節に「サウルは二度とダビデを追おうとはしなかった」と記されています。ダビデが願った通り、これで追われる生活から解放されました！またダビデはガテの王アキシユに、その地での滞在を許されたばかりか、一つの町ツィケラグを与えられます。そこでみんなで落ち着いて普通の生活ができます。定住生活ができるのです。7 節にあるように、その日数は 1 年 4 ヶ月にも渡りました！良かったじゃないですか。ダビデの計画はうまく行きました。いや思っていた以上に良い結果となりました。やはりこうすることが今回は最善だったのだと彼は思ったのでしょうか。

しかし続く記事を読むとダビデがだんだん難しい状態に落ちて行ったことが分かります。彼は今、ペリシテの王のもとにかくまってもらっていますが、ただでこの恩恵にあずかるわけにはいきません。やはりアキシユのしもべとしての働きをしなければならない。それでダビデは 8 節で、ゲシュル人、ゲゼル人、アマレク人を襲ったとあります。そして略奪したものを携え、アキシユのところに「戦利品です！」と言って持って行きます。アキシユはそれを見て、「今日はどこを襲ったのか。これらはどこで手に入れたのか？」と聞くと、ダビデは抜け抜けと、ユダのネゲブとか、エラフメエル人のネゲブとか、ケニ人のネゲブと答えます。まるでイスラエルの南の町々を次々に攻撃しているかのような報告をしました。それでアキシユはダビデを信用して、「しめしめ、ダビデは進んで自分の同胞イスラエル人に忌みきらわれるようなことをしている。彼はいつまでも私のしもべになっていよう。」と思ったのです。私たちはこれを読んで少なからぬショックを覚えます。ダビデはウソをついたのか！自分に良くしてくれているアキシユを騙したのか。しかもダビデはウソがばれないように、ガテに一人の捕虜も連れて来なかったと 11 節にあります。確かに連れて来たら大変なことになります。その捕虜はしゃべってしまうでしょう。「ダビデの言っていることは違いますよ、彼が襲ったのはイスラエルの町々ではありませんよ」と。それを防ぐためにダビデはどうしたか。彼は何と襲った町の男も女も生かしておかなかったというのです。皆殺しです。虐殺です。ある人は今日の価値観と当時の価値観は違うのであって、今日の間から非難すべきでな

いと言いますが、当時の人たちでも通常ここまでしません。後の 30 章でアマレク人がダビデたちの住むツィケラグを襲いますが、彼らは捕虜は一人も殺さずに連れて行きました。ですから後に全員を取り戻すことができたのです。それに比べてダビデのしたことは明らかにやり過ぎです。極悪非道です。

こうした悪を重ねている内に、ついに最も恐るべき事態が発生してしまいます。28 章 1~2 節でペリシテ人とイスラエルの戦いが生じます。アキシュはダビデを信頼し、「あなたとあなたの部下は、私といっしょに戦争に行ってもらおうよ！相手はイスラエル人だよ！」と言います。ダビデは答えます。「よろしゅうございます。このしもべがどうするか、おわかりになるでしょう。」まるでこれまで通り、私はあなたに忠実なしもべとして働きます！と答えているかのような雰囲気です。実際には忠実に仕えていなかったのですが……。果たしてダビデはどうするのでしょうか。もし彼がここでイスラエルと戦うようなことをしたら、もはやイスラエルの王になることはできません。彼はこれまでひどい虐殺も行ないましたが、イスラエルを攻撃することだけはしませんでした。しかしもしここで自分の同胞を傷つけ、滅ぼすようなことをしたら、もう王になることはできない。その結果、神がこれまで準備し、導いて来られた救いの計画は全部パーになってしまいます！しかしだからと言って今回の戦いには出かけないというわけにもいかない。こうしてダビデは大変な状況へと追い込まれたのです。これは 27 章 1 節から見て来た通り、彼が自分の悟りに頼る歩みを進めて来た結果ではないのでしょうか。箴言 14 章 12 節：「人の目にはまっすぐに見える道がある。その道の終わりは死の道である。」ダビデが自分の目に良いと見える道を進んで、今や到達しようとしていたのはまさに死の道だったのではないのでしょうか。この後、サムエル記の著者は、サウルに関する出来事へと一旦話を移します。そして今日の続きは 29 章に記されます。その間、この書を読む者たちは、いわば緊張状態に置かれるわけです。ダビデは一体どうするのか。なぜこんなことになってしまったのか、と。そのことを、少し時間をかけて思い巡らすようにという効果がここにあるのではないのでしょうか。

以上の箇所から私たちは何を学んだら良いでしょうか。三つのことを述べて終わりとしたと思います。まず一つ目はあのダビデも決して完全な人ではなかったということです。26 章までのダビデは立派でした。数々の困難を、主への信仰によって乗り越えて来ました。その彼がこの章では全く別人のように振る舞っています。そのため、読む私たちはうろたえてしまうのです。前の章のダビデとこの章のダビデはどうして同じ人間で

あるだろうか、と。しかし私たちはこれを人ごとのように不思議がるべきではないと思います。私たちも自分を振り返って同じようなことがあるのではないのでしょうか。昨日まで数々の恵みを受けて立派な信仰告白をし、信仰の階段を一つ上がったと思ったのに、その次の日に昨日までとは別人のようになってあつという間に転んでしまう。昨日までに培われた信仰が生かせず、人間的な思いに支配されて、誤った道を進んでしまう。私たちはダビデもその例外ではなかったということを思わされます。いやあのダビデでさえこうだったら、私たちはもっとたやすくこのような不信仰に陥りやすいことを思って自らを点検し、一層警戒させられてこそ本当ではないのでしょうか。

二つ目に思われることは、今のことと関係しますが、ダビデもまたただ主の恵みによって生かされ、用いられた器であったということです。ダビデは人の目にまっすぐに見える道を進んで、ついにその終点にある死にたどり着くような状況にありました。ダビデはこれで終わりでしょうか。不信仰の報いを刈り取って終わりなののでしょうか。この後 29 章を見る時に分かりますように、ダビデには驚くべき恵みの導きを与えられません。解決不可能だと思われた彼に神がまさかの解決をくださるのです。ある人はその成り行きを見て文句を言うかもしれません。なぜこんな彼に主は恵みを与えるのか。なぜふさわしい罰を与えないのか、と。しかし私たちはどうでしょう。私たちは自分が犯した罪に対して 1 回 1 回、それに見合った報いを必ず神から受けているのでしょうか。むしろ日々たくさんの罪を犯しているのに、神はその一つ一つを取り上げることなく、かえって信じられないようなあわれみをもって導いてくださっていることがあるのではないのでしょうか。私たちはこのダビデが、ただあわれみによって導かれる様子を見て驚くと同時に、自らもそのように導かれていることを鏡を見るようにして見させられて感謝し、その御名をほめたたえるべきではないのでしょうか。

そして三つ目は、この神のあわれみを感謝する私たちは、悔い改めて神にこそ信頼する歩みへ進むべきであるということです。神のあわれみは私たちが悪にとどまり続けるためのものではありません。それは神の御心にかなう歩みへ進むための恵みです。箴言 3 章 5~6 節：「心を尽くして主に拠り頼め。自分の悟りにたよるな。あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。」 私たちもともすると困難な状況でダビデと同じように「これよりほかに道はない」と考えがちです。神に祈らず、神の御言葉に聞くこともしないで、「今はこうするよりほかに道はない」と結論する。しかしその道を進むところに幸いはありません。今日の章のよ

うに最初はうまく行っても、やがて思わぬ方向へ追い込まれて行く。そして引き返すことができない恐ろしい状況へたどり着いてしまう。そうならないように私たちに命じられていることは、心を尽くして主により頼むこと。どんな状況においても主を認め、主と、主の御言葉に従うこと。そうする時に主が私たちの道をまっすぐにしてくださる。ですから私たちは「ほかに道はない」と結論したくなる時、「本当にほかに道はないのか」と問いたい。たとえ良い道がその時の自分に見えなくても、主に信頼し、主の御言葉に聞き従う道に進みたい。真の知恵は主を恐れ、主の御言葉に聞き従う歩みに与えられます。そうするなら主が私たちの前に道を切り開いてくださり、その道をまっすぐにしてくださり、ご自身が備えたもう最善の祝福へと私たちを導いてくださるのです。